

## 弘前博覧会と青森の近代化 ―その出品物を中心に―

上條 信彦

## はじめに

明治政府がはじめて正式に参加した博覧会は、明治六年（一八七三）のウィーン万博であった。博覧会は、近代化を進める日本を世界にアピールする限られた機会の一つであった。国内でも近代化促進のため数多くの展覧会が開催された。国内で最初に開催された博覧会は明治四年（一八七二）の京都博覧会で、明治維新の遷都によって沈滞した京都の活性化のために計画された。西本願寺大書院などが会場として使用され、内容は名宝や珍品を集めた展覧会に近いものであった。一方、明治一〇年（一八七七）には東京上野公園で第一回内国勸業博覧会が開催され、国内物産の開発と奨励が主要な目的であった。<sup>①</sup> 明治期には各地で博覧会が開催され、地方の近代化に一定の効果をもたらした。対外的な効果を期待した万国博覧会や明治政府の政策が読み取れる内国勸業博覧会は、資料や研究が豊富に存在している。<sup>②</sup> 地方で開催された博覧会は、出品物の目録<sup>③</sup>とともに、長野、会津など複数の地域での研究事例もある<sup>④</sup>。その中で、青森県では明治七年（一八七四）に第一回弘前博覧会、明治

一三年（一八八〇）に第二回弘前博覧会が開催された。これらの二つの弘前博覧会は、明治初期の博覧会一覧を見ても、全国的にはかなり早い段階で開催された博覧会の一つとして注目される。特に第二回弘前博覧会は、古物や珍品を集めた見世物的な地方博覧会とは異なり、その独自性が際立っている。しかしながら、公文書や錦絵などの情報が限られているためか、明治初期の博覧会一覧に掲載されていないばかりか、その後の博覧会史においても言及がほとんどなく、地域の近代史においても評価が確立されていない。開催経緯や内容も不明瞭である。一方、出品物には多くの考古資料が含まれており、これが佐藤部らの注目を浴び、近代の青森県の考古学の基礎となった。<sup>⑤</sup> そのなかで、筆者は博覧会の実態を示す新たな史料を見出した。

したがって、この論文では、第一回・第二回弘前博覧会の開催経緯や内容、および津軽地方の近代化に果たした役割に焦点を当て、出品物に注目しながら詳細に説明する。論文ではまず、新聞記事を元に開催経緯と内容を紹介し、その後、出品物と出品者に焦点を当てて出品の意図や背景を考察する。

## 一 第一回弘前博覧会の出品物

青森で初めての博覧会である第一回弘前博覧会は、明治七年（一八七四）八月五日から一四日まで、東奥義塾博覧会社によって開催された。東奥義塾は、明治五年（一八七二）に設立された私立学校で、その前身は藩校の稽古館であった。藩校の伝統を受け継ぎながら、慶應義塾をモデルとし、英語教育に力を注いでいた。明治六年（一八七三）には、東北地方で初の外国人英語教師を招聘し、明治八年（一八七五）には小学校女子部、明治十一年（一八七八）には中学校を設立した。明治六年には、弘前で初めての小学校も開校していた。明治八年（一八七五）には博覧書院を創設し、一般にも有料で開放し、図書館機能を充実させた。この博覧会は文明増進の目的で開催された。<sup>6</sup>当時、新潟、奈良、会津若松などでも博覧会が開催されており、青森県最大の都市である弘前では文化的にも経済的にも条件が整っていたことが背景にあったであろう。夏期休業中には、全校の職員と生徒全員が物品の運搬や説明などに協力した。毎日数千人の観覧者が訪れた。<sup>7</sup>出品物には古物、美術品、絵画、武具、地方産物などが含まれていた。詳細については、明治七年に発行された『博覧会物品目録』<sup>8</sup>が存在する。これは、頒布用に刷られた一枚物で第三号までが残る。第一号には第一（掛幅・疋紙・巻物）〜二（掛幅）室、第二号には第二（掛幅・器物）室、第三号には第二・三（掛幅・器物）室の出品物名が書かれている。第三号末には「余四号出」とあるので第四号までは発行予定だったとみられる。この目録によれば、出品

物は掛幅（書軸）六三点、疋紙（色紙）一四点、巻物四点、掛物（画軸）三五点、器物一三四点、仏像類五点の計二五五点が掲載されている。天皇宸翰や公家、武家、著名人の書画や文具、武具、さらに動植物や鉱物、古銭などが目立ち、中には久渡寺の幽霊画<sup>9</sup>も展示された。このように、第一回弘前博覧会は文明増進を目的としつつも、名宝や珍品を集めた見世物に近い性格を持っていた。

## 二 第二回弘前博覧会の経緯

第二回弘前博覧会は、明治十三年（一八八〇）八月に開催された。博覧会の情報は主に、明治十二年（一八七九）に創刊された青森新聞を通じて告知された。七月一日には、博覧会開催の告知記事が掲載された。<sup>10</sup>

弘前の火災以来は自然と土地も淋れて人氣も衰え以前の姿に復するをばとても目下に見込なしとは人々の言ふ所なるが、今度同所の須郷元胡、本多庸一、田中眼叟の三氏が慨然之憂いて土地潤沢のため方々衆人の開智に益せんと県庁の許可を得て東奥義塾に於て博覧会を開かるるよし。其陳列品の大概を聞くに農具、植物、動物、鉱物、書画、武器、新古器物、教育器械等にて、其の内動物類は北海道より最も珍しき者を取り寄せられた東京よりは油絵の美なるものを取り寄せらると右日数は来る八月一日より二五日まで一五日間にて会場を除くほか一切の入費は右三氏にて受持るといふ。就ては何に抛らず珍奇の物品は開会中差し出されたき旨、弊社へも申越されたり。誠に稀有の美事にこそある。<sup>11</sup>

時代背景を見ると、明治一三年三月二十七日には本多庸一・菊池九郎ら国会開設の県内遊説を終え、青森蓮華寺に会合し、二一名の委員で建白書を作成するなど、国会開設運動が活発化していた。また、士族授産のために開牧社や盛蚕社、漆器樹産会社が設立され、三井銀行弘前出張店の設立や青森―弘前間の電信架設など、近代化が進められていた。須郷元胡（元雄）、本多庸一、田中眼叟（耕二）は、会場である東奥義塾の結社メンバーであった。弘前は、廃藩置県により政治や行政の中心地が青森に移され、政治だけでなく、交通や産業など、近代化への立ち後れは主催者にとって大きな課題であった。そのような中で、明治一三年五月一日に元寺町柵木座から出火した大火により、弘前は一、〇六四戸を焼失し、人口減少に拍車をかけた。その復興の足掛かりと、近代化に沿った新たな街づくりと産業振興を民衆にアピールすることが目的であった。博覧会開催の翌年、明治一四年九月には明治天皇巡幸を迎え、街の復活を大きくアピールすることになった。明治一三年七月一三日には、弘前博覧会規則が公示された。<sup>19</sup>

第一条 弘前博覧会は本年八月十一日より同月二十五日迄中津軽郡弘前町東奥義塾舎内に於いて開設すべし

第二条 会場は毎日午前九時之を開き午後五時之を閉ずべし

第三条 会場に陳列すべき物品は天品人工の物産及新古の器物画教

育農工業の器械等とす

第四条 陳列物品へは出品者の姓名標を付すべし

第五条 出品売捌き致したき分は定価を記すべし

第六条 同種の売品二個以上無之分は約定取結び置き閉会の際相渡

すべし

第七条 列品場中一席を引き受け出品売り卸したしき者は相当の席料を払わしむ

第八条 出品運送等に関する入費は出品者を煩わさざるべし

第九条 出品者へは相当の謝礼を遣わすべし

第十条 出品は閉会后十日限り出品者へ返済すべし

第十一条 場内は機械用の外火気を禁ず

第十二条 総て看護人の承諾を得るにあらざれば陳列の物品に触るを許さず

第十三条 観客場中に入る者は必ず縦覧札を携ふべし但し背負の小児は縦覧札を要せず

第十四条 縦覧札を分けて三種とす。大縦覧札十歳以上の者之を携ふべし、三銭。小縦覧札十歳以下の者之を携ふべし、一銭。特別縦覧札、無料。

第十五条 特別縦覧札は一枚を以て始終会場に出入りするを得ると

雖も他人に貸与すべからず。尤も入場の節は必ず入口番人に之を渡すべきものとす

第十六条 縦覧札売捌処は門前に之を設くべし

第十七条 出品者へは特別縦覧札一枚づつ相渡すべし

第十八条 縦覧札を携ふと雖も狂疾或いは酔者と見受くる際は入場を許さず

なお、第十七条は後日、縦覧札を渡すことに変更された。規則を見ると、期日は第一回と同じく夏季休暇を利用するものとされている。勸業

博覧会の影響を受けて出品範囲が広がっただけでなく、売買もできた。さらに、出品に対する謝礼や縦覧札の提供、運搬の負担など、出品者への便宜が大いに図られていた。

### 三 第二回弘前博覧会当日の盛況と会場配置

青森新聞明治一三年八月二十七日（二五三号）から同九月一日（二五六号）連載の「弘前第二回博覧会縦覧の記」にはその盛況ふりと展示会場の様子が書かれている。

義塾の門前には博覧会と大書したる旗標を高く空中に翻し門と玄関に白き幕を掛け入口を二つに分けて正面を縦覧人の入口となし右方を役員の入口となし門前より城の入口まで縦横に竹欄を設けて来観者の雑踏を防ぐ。老幼の男女門前に群集して争ふて切符を買ひ正面の受付に符を渡して直ちに楼の階子を登り右曲して入る。陳列の場を楼の上下に設け区画して二〇室となす。校楼には第一室（鉱物書画）より第二室（動植物書画）、第三室（勸業製造物書画）、第四室（勸業品の内漆器書画）、第五室（茶器書画）、第六室（新古器物書画）、第七室（美術品書画）、第八室（西洋品書画）を設け階子を下りて楼下には第九室（武器書画）、第十室（美術品書画電信機樂器）、第十一室（古屏風書画）、第十二室（仏書画）を置き寄宿所の楼下には第十三室（農具紡績機播付木および石鹼製造機）、第十四室（公家装束および書画）にしてその楼上に第十五室（古代夫人の倭服鞆靴王の支那服書画）、第十六室（西洋婦人の服および書画）、

第十七室（瓶詰缶詰の食品書画）、第十八室（人骨書画）を置きまた楼下りて第十九室（新聞雜誌類）、第二十室（學術機械）あり。その外校庭の左右に棚を架け植物を陳列し、傍なる水茶屋の前に大なる鉢に金魚を飼ひ、又庭前の籠に鶴一羽を置けり。<sup>14</sup>

去る十一日よりの開場なりしが時節恰も旧曆の盆前に当たりし故か来観人も格別多きに至らず去十八日に至るまでは少きは二七、八〇より多きは九五、六〇人までにて千人の数に上らざりしかとも、十九日より俄に増加して一、三五〇人に及び、二一日は縦覧人午前より夥しく楼上楼下群衆の為に陳列の物品を逐一看取するを能わざるほどにして、本日の数は大約二千人なり。「中略」されば義塾にても十三日間の日延願を差出せし由なり。

陳列の物品は予て広告ありし如く固より開場前に悉皆揃うべき見込みのところ、出品者の躊躇決せざりしによるか開場の後に至りて日々続々と集い来たり。もはや開会日限の過半を経るの今日に至れどなお陸続として止まず。それ故手順くるひて同会事務上の混雑を起こし最初予定の人員にては手廻らず義塾の諸子達は汗にまみれて必死に勉強せり。然れども物品は十分に備えられ陳列場も整へり。但し物品の説明書を附けざるが此の會の欠点といふべし。去れば各室に一人又は二人と一時間代りに付けかかる監守の人々が縦覧者の問に應じて「中略」逐一説明するの煩あり。併し是も前にいへる如く開会の始めより事務の手順混雑せしゆえと察せらる。<sup>15</sup>

物品の数その幾千萬なるを知らず殊に書画最も夥しくして毎室悉く書画の四壁に展列せざるなく新古器物またこれに次いで多し。勸

業殖産に係る物品は主に三戸地方より出すもの居多にして改良著るしきものは麻蘭の類にして殊に質美にして品位良なるは三戸郡田子村緒方豊七の出品に係る生糸をその最となし。津軽地方にての上等に当る生糸は北津軽郡五林平村米田慶助の出品に係るものにて麻の最良品は北津軽郡湊村農業会社より出すもの、之に次ぐものは三戸郡根城村小笠原隆安の出品に係るものなり。

過日来紙上に掲げし県下国産の一なる漆器に至ては成程見本板重箱等美々しく色漆をもつて模しあれども惜いかな寧ろ華美に失して雅致なしと評して可ならん。唯漆工阿房勝之助が扁額に鯉の漉登りを模せしはやや塗工の妙処を顕すがごとし。農具も一通り備わりてカルチベートル、シュッブルプラウその他玉蜀黍落し及び秣切等の機に於ては最も農家の労力を省くに益あるものなり。又同会第三室に於て最も奇なる乾草を見たり。俗これを称して孫の手といふ。莖長くして数条の枝を生じ毎条の先に凹処あり。其の縁に刺様のものを生ずる。さながら人手の指を広げて揚たるが如く蠅虻の如き小虫飛て其の凹処に触れば忽ち握つて放たず。その体の汁液を吸いつくして之を殺すといふ。聞くところによれば此の草は弘前の人にして先年より大学南校の動植物学科生徒たる岩川氏がこの程蝗虫捕獲のために当県へ来たりし時岩木山上に於いて発見せしものなりと余往年植物学を閲せしに南亜米利加に此類の草あるを知れども固より其の形態を異にせり。然れども動作植物の類に於てはその機用を同ふせり。<sup>16</sup>

本文中の岩川氏は、植物分類学者の岩川友太郎であろう。彼はエド

ワード・S・モースに師事し、後に日本初の貝類目録を刊行した。岩川は夏休みの帰郷の際、弘前の実家から標本採集を行い、明治十三年（一八八〇）にその標本を東京大学に持ち帰った。<sup>17</sup>これは日本人による青森県内で最も古い植物採集記録であり、その中には新種のムツノガリヤスも含まれていた。<sup>18</sup>岩川は東奥義塾で英語教師を務めており、またちよろど博覧会の会期が夏期休暇中で、帰郷していたことから、今回の出品に至つたと考えられる。本文の「孫の手」は、モウセンゴケのことと思われる。

木村牧は「最も初めは諸名家の宝物名器書画等を借り来り、之に学校の書籍や理化学機械など加えて説明したる位にて、古物展覧に過ぎざる様なりしが開けざる時の事とて、〔中略〕二回目には盛に農産物を加へ、工業品も交へ、木材鉞石の標本も列ね、理化学機械の説明実験も成丈け多くし、稍博覧会の体裁を備ふるに至れり。」<sup>19</sup>と述べている。

盛況のため、当初の終了予定日である八月二十五日から、九月七日まで延長された。記事の内容から見学者数は次のように推計される…一日から一八日までの平均で二七〇〜九五〇人（六一〇人）、一九〜二〇日に一、三三〇人、二一日〜二五日に二千人、延長された一三日分に千人。合計で約三〇、五八〇人となる。観客数は三万人に達したとされ、<sup>20</sup>これは誇張ではないと考えられる。出品については、明治十三年七月中に、陳列手続きに時間がかかるため八月七日に出品を取り揃えるよう告知されていた。しかし、開催後も出品が続いた。おそらく、これまでの展示は、旧藩士や寺社を中心にした古器物や珍品に焦点を当てていたが、実際に見学してみると、身近な商品や殖産興業に関連するものが出品され、

さらにそれらを売買できる機会が提供されているという情報が、市中に徐々に広がったことが大きな要因であったとみられる。

#### 四 博覧会出品物の収集過程

博覧会出品物は、青森新聞明治一三年九月一日(二五六号)から同三〇日(二七〇号)掲載の『第二回弘前博覧会列品目録』(以下『列品目録』)がある。列品目録には展示室名、出品物名、出品者名が展示室順に書かれている。掲載された出品物は総数一、三二二点である。さらに、新たに発見された『甲号 博覧会出品受取簿』(以下『受取簿』、図1)が存在する。この『受取簿』

は、博覧会記録掛によって明治一三年七月三〇日から作成され、出品物の名称、製作者、出品数、出品者の住所、出品者名、出品物を持ち込んだ者名が収集日順に記載されている。ここに記載された出品物の総数は八四九点である。ただし、『列品目録』には更に多くの出品物が含まれており、そ

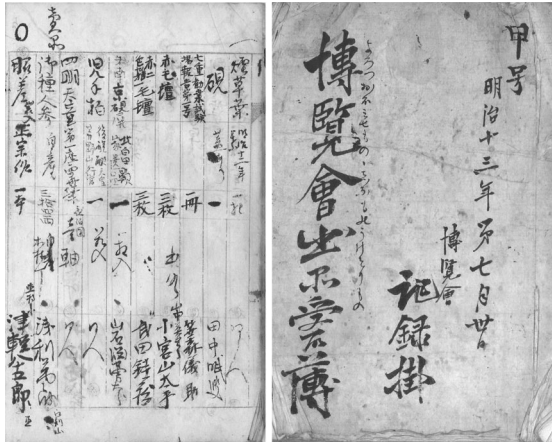


図1 『博覧会出品受取簿(明治13年7月30日)』

の総数は三千点とされている<sup>22)</sup>。『列品目録』には、一括で表示される出品物や新聞に掲載されなかった出品物も含まれているため、この三千点の総数は過度な誇張ではないといえる。『列品目録』と『受取簿』の総数には差異があり、これは出品物の数え方の違いによるものが多い。『列品目録』は記事のスペースの都合から、まとめて扱われる出品物や、直接売られたり記録から漏れたりしたものも含まれている。例えば、賞状、書籍、西洋の品物、機器などがまとめて記載されている。一方、『受取簿』にはそれらの詳細情報が記載されていることもある。また、『列品目録』『受取簿』双方に記載がない出品物も存在し、例えば上記、金魚や「孫の手」などの動植物がこれに該当する。

一方、『受取簿』には「甲号」と記載されていることから、受付の段階で同様の帳簿が複数存在し、本文書はその中の一つである可能性が考えられる。特にこの『受取簿』は、会期前に収集したものが中心で、会期中に持ち込まれた出品物が含まれていない可能性が高い。

出品物の収集過程を詳細に検討してみる。『受取簿』の記録は明治一三年七月三〇日から始まっているため、告知に従い、開催の二週間前から収集が開始されたことが分かる。出品物を会場に持ち込んだ持参人には、出品者やその近親者の他に、小笠原精一、木村繁四郎、工藤造酒之丞、山中三津雄などの名前が頻りに登場する。これら人物は『東奥義塾再興十年史』<sup>23)</sup>の明治一一年在籍者一覧に含まれ、義塾生が会場での受付や案内だけでなく、出品者からの依頼を受けて出品物の借用や返却などの実務を遂行したことが示唆される。そして、『受取簿』の各出品物には「田中」の印章があり、出品者の名前の下に「服部」の確認印が見ら

れる(図1)。田中は田中耕一、服部は服部尚義と考えられる。このことから、持ち込まれた出品物の受け渡しの確認や管理などの監督業務は、自由民権運動の共同会のメンバーによって遂行されていたことが理解される。

出品地域は主に弘前を中心とする九〇町村および津軽郡全域から多くの出品物が持ち込まれた。また、隣県では秋田県大館の歌人、館忠資が巻物や短冊などの出品物を直接持ち込んだ。

弘前以外の広範囲からの出品過程について、藍玉の事例が示唆に富んでいる。藍玉は、桑井貫二が阿波国から取り寄せて出品したものである。桑井貫二による藍玉の出品については、長尾介一郎(助一郎)の日記にも言及がある<sup>24</sup>。日記によれば、桑井貫二は明治一三年に青森県第二課勸業課の藍栽培教師として招聘され、その当時、勸業課の長尾介一郎が七月二十七日に出品の打診を行い、八月末に出品が実現した経緯が記録されている。同様に、藍を出品した糸屋利三郎も桑井貫二から藍栽培の指導を受けたとされている。『列品目録』において漏れていたこれらの出品物は、当初予定されていたものではなく、出品が決定されるまでに時間がかかったことが理由であると推察される。

藍と同じように勸業生産品を中心に、郡役所を通じて、出品人へ打診が進められた結果、弘前以外にも出品物が集まる過程が確認される。『受取簿』には、西津軽郡および三戸郡の役所から弘前博覧会宛の回答書原本が添付されている。

西津軽郡の場合、「右之通出品相成候条御入掌有之度候也。明治十三年八月八日 西津軽郡産業係 弘前博覧会催主 菊池九郎殿・本多庸一

郎殿。」とあり、出品者は九名、二二点が出品された。

三戸郡の場合、「前掲之通当郡下人民ヨリ其博覧会へ出品之儀出願ニ付採集及御送致候条宜敷御取計有之度此段及御依頼候也。但代価付之分ハ御地ニ而御売却被下度、通送費之儀ハ追テ詳細為取調而可及御報知候条 右御了承有之度事。明治十三年八月三日 三戸郡役所産業掛(印) 東奥義塾ニ於テ 弘前博覧会事務掛御中。」とあり、出品者は二六名、六二点が出品された。

弘前以外からの出品物のほとんどは生産品であり、復路の手間を省くために売買された。三戸郡の出品者の多くは旧藩士で、中には八戸港建設の基礎を築いた浦山太吉や、三戸郡で林檎栽培の創始者である諏訪内甚藏などの名前が見受けられる。出品物は養蚕関連が多く、麻、茶、煙草、紙など特産品が多数出品された。特に諏訪内甚藏は、一四品を提供した。このように、郡ごとに出品がまとめられたほか、『受取簿』の出品人には牛瀉村、車力村、鱈ヶ沢村などの村名があり、津軽の場合は、村ごとにまとめて出品された。こうした郡や村単位の協力によって、勸業生産品を中心に広範な地域からの出品が実現した。

## 五 出品物の内訳と出品者

表1は『列品目録』をまとめたものである。書画が四五〇点と最も多く、鉱物一五五点が続く。ただし、古器物は茶器や武器、文具などに細分されているため、実際には、書画に次いで多いとみられる。そのほか売物や農産物も相当量あったことが、『受取簿』からうかがえる。第一

一回前博覧会の出品物と比較すると、多数が重複しており、一回前博覧会の出品物も再出品されたとみられる。

第一室の鉱物を見ると、水晶や琥珀、珊瑚といった宝石や、化石や鉛石がある。そのほか、鉱物資源も出品された。第二室の動植物も鼈甲細工の素材となる小泊之産の玳瑁<sup>25</sup>などがみえる。第三室の勸業製造物は本博覧会の目玉の一つであった。この中には現在、津軽の特産となっているものも少なくない。農産物では胡瓜、早南瓜、洋種葡萄、西洋桃、西洋林檎、無花果、朝鮮人蔘、蒟蒻、紅藍花、工芸品では、箒、筵、蔓細工、竹細工、包丁類、桐油、生糸、美濃紙がある。特に津軽塗は別室を設ける力の入れようである。そのほか、第十三室と第十七室、屋外でも殖産興業に関わる出品があった。第十三室は農具などの器械が並ぶ。乳油、紡績、摺附木、養蚕、石鹼製造といった新たな製造業と、玉蜀黍、畜産といった新たな農産物の奨励、および西洋式農具による農作業の近代化の意図がうかがえる。第十七室の食品には、蕨・山百合・片栗・栃の澱粉、蘆粟糖蜜、昆布品発明製造品、茶、ブランデー、肝油、山葵油、向日葵油、スグリ酒、榎李酒、干鰯鮓、干素麵、煎餅、湯葉、香水が出品された。

第八室には西洋品が出品された。海上日出ノ景が描かれた油絵は青森病院、寛政年中ノ油絵が東奥義塾より出品された。青森病院からは本業を示す医療器械が出品された。そのほか田井辰善が西洋什器を出品した。東奥義塾からは、食器やベッド、楽器、調理器具、学術器械として地球儀や顕微鏡、六分儀（セキスタント）が出品された。また外国人教師も出品に協力した。米人デビソン、英人テンニングは第十六室で衣類を出

品した。デビソンはイング夫妻の後、明治一年に着任した宣教師のジョン・キャロル・デヴィソン (John Carrol Davison) である。

そのほか、第十九室には教育の一環として小学生の書が展示された。盈進小学校は明治一〇年（一八七七）六月に百石町に創立されたが、明治一三年の大火で焼失した。書の展示は被災した小学生を元気づける意味もあった。また、女子師範学校附属小学校および女子師範学校の生徒による書や作品も展示された。青森県立女子師範学校は、東北地方初の女子師範学校として、明治一〇年に元寺町含英小学校に設立された。そのほか、公立学校では青森県医学校から鉱物や人骨標本、青森師範学校から物理器械など、教材が出品された。明治一〇年に設立された医学校は、公立医学校として全国でも早くに設立された学校の一つであった。

このように、第二回一回前博覧会は、第一回よりも遥かに多彩な出品物で構成されていた。自然資料、江戸時代以前の古器物、明治時代以降の輸入品・農産物・工業製品といった三つのカテゴリに分けてみると、自然資料二二一点、古器物八三〇点、明治期以降の輸入品・農作物・工業製品二六二点で、約二〇%が近代化を象徴する資料に分類される。さらに一回前以外から持ち込まれた出品物は縦覧者にとっても、新しい時代の到来を感じさせるものであった。

また、出品者に焦点を当てると、『列品目録』には四〇四人分、『受取簿』には二五四人分の出品者名が記載されている。このうち半数以上が二点以上の出品をしている。最も多かったのは主催者である東奥義塾で、百点以上を出品した。義塾の出品物には、西洋から導入した教育機器から測量器具、北海道地域の農作物、所蔵の古器物まで幅広い種類が



表1 『列品目録』における出品数と主な出品物

展示室	種類	点数	主な出品物
第1室	鉱物	155	珊瑚北海道岩内村ノ産、海松、十勝石、水晶、琥珀、鐘乳石、木化石、貝石、菊銘石、亀甲石、舍利石、銅鉱、石灰石、水銀鉱、鉛鉄、磁石、硫黄、土炭、矢鏃石、禹余糧、鮫舌
第2室	動植物	62	猿頭、犀角、玳瑁、矢柄魚、獅子魚、小判魚、九穴貝、白髪貝、鮫貝、平家蟹、蛇ノ兜、鹿茸
第3室	勲業製造物	109	有用木材抄覧、十三海草草筵、旛檀、帚草、胡瓜、白瓜、早南瓜、大菜豆、洋種葡萄、玉葱、西洋桃、西洋林檎、葉煙草、無花果、麻、縮藍藤崎種、紫薄荷、牧草苜蓿、金柑瓜、西洋菜豆、甲州葡萄、薑玉、蒟蒻草、粟、稻、小麦、六角大麦、二角大麦、燕麦、鹿角、北鱈、竹細工、蔓細工、櫛、篋、包丁類、猿手人參、朝鮮人參、桐油、生糸、美濃紙、紅藍花
第4室	勲業品の内漆器その他	12	重箱、足臍、長箸、茶入、真鍮茶釜、巾着
第5室	茶器	65	花入、茶棚唐物、茶碗、茶筒、茶入、大壺、香合、香炉、茶壺、火箸、建水、茶扱、水指、釜、木炉縁、円座、平東
第6室	新古器物	85	香炉牡丹時絵、朱塗木杯武田信玄所用、木杯和田義盛所用、小幡弁丸感状信玄花押、菊池武光武重故廟ノ壁、槍穂弁鍔金物藤崎村ヨリ掘出、駅鈴橋正成祭修具、棒石、石剣、笛新羅一郎所用、長円形石櫃百沢元宮ヨリ掘出、埋木床飾浪岡村字若松ヨリ掘出、石像人像・獅子頭・瓶碎片浪岡字御前館ヨリ掘出、金物・瓶碎片同隆ノ森ヨリ掘出、茶臼碎片北畠古城跡ヨリ掘出、香炉亀ヶ岡掘出土器、土器亀ヶ岡掘出、皿石、皿石高館山麓、武蔵大森古物編、古金銀銅貨、円柱石・匡衡枕石、下緒大石主税所用、同大石良雄所用、同大石瀨左衛門、方寸匙、雷斧石、胡佐、扇面、袖大塔宮ヨリ北畠顯家卿二賜所・総角同・旭旗後醍醐天皇北畠顯家卿二賜所、淀君打掛ノ切、信長公ノ花押、太閤秀吉公花押
第7室	美術品	72	香炉、香箱、香合、香盆、花生、硯、葉籠、堆朱肉入、象牙細工、盃及合、御所茶碗、菓子盆、雜道具、提重、琉球塗重箱、七宝焼
第8室	西洋品	4	額面油絵海上日出ノ景、額面油絵寛政年中ノ油絵、西洋什器
第9室	武具	64	甲冑信政公ノ所着、鎧浅野長政所用、甲冑川村弥助所着、小銃和製古来種子島、和時計、脇差、太刀、短刀、鎧、鐙、大砲、小銃六連発魯國親王所蔵故大尉村田成禮、肥後旗津輕爲ノ常二所用、薙刀一戸三之助所持、薙刀北畠顯家ノ所持
第10室	美術品書画電信機楽器	66	文台、硯箱、文庫、盆山、淀君打掛ノ切、天狗面、琴、笙、箏篳篥、笛、鐘鼓、太鼓、琵琶、電信器械、海底電線見本
第11室	古屏風		(第10室に統合)
第12室	仏	14	巫女守及珠敷、保食神体、六重塔蠟石ニテ作、狐ノ玉、念仏具、自然厨子金華山産、仏像將軍地藏ノ作爲信公肌守、仏像天竺細工、仏舍利、珠敷阿蘭日和玉二作ル、屏風二枚折、大嶽九ノ齒
第13室	農具紡績機播付木および石鋸製造機	35	荷車、一輪車、大ショウワプル、スペースス、鉄道レイキ、ヘーレーキ、ホー、四本爪ホーク、肥後馬糞、一輪車、腐瓜、引懸鞆、押鞆、鋤、種時器械、玉蜀黍落器器械、乳油製造器械、紡績器械、摺附木器械、養蚕器械、草切り器械、フラオ、石鋸製造器械
第14室	公家装束	4	束帯、鏡、素袍並烏帽子、詞藜勒
第15室	古代夫人の倭服韃靼王の支那服	7	紅ノ袴、韃靼錦衣、葛衣総模様織、綿入ノ打掛総織
第16室	西洋婦人の服	1	西洋婦人衣類
第17室	瓶詰缶詰の食品	38	籾、蕨ノ粉、山百合ノ澱粉、寒晒、胡瓜ノ酢漬、片栗ノ粉、栃ノ粉、蘆粟糖蜜、昆布品発明製造品、茶、ブランドー、肝油、塩浅虫製、スグリ酒、山葵油、梅李酒、干餛飩、干素麵、煎餅、湯羹、向日葵油、香水
第18室	人骨	2	人骨
第19室	新聞雑誌類	48	書(盈進小・女子師範学校附属小・女子師範学校・東興義塾・青森第二小・八戸小の生徒・学生作品)、手鞠・袱紗(女子師範学校生徒作品)、総指(東興義塾教員作品)、草木真形図阿茶、蘆粟糖製造手続書、新聞紙、虞列伊氏解剖訓蒙圖、平尾魯仙著述物
第20室	学術機械	10	物理器械、医術器械、測量器械
屋外	動植物	22	盆栽、朝鮮人參、阿波ノ小千本藍、蒟蒻、稻、西洋葡萄、鶴
第1室	書画	15	掛物(柴栗山・頼山陽・篠崎小竹・南洲ほか)
第3室	書画	12	掛物(三上仙年岩木山図ほか)
第4室	書画	31	掛物(菅原長親・皆川淇園・芭蕉・大雅堂・蜀山人・文晁山水図・狩野探幽山水図・毛内茂幹孔子像図ほか)、屏風(大雅堂)
第5室	書画	22	掛物(大燈国師・兼好法師・伊達政宗・一休・伊藤東涯・小堀遠州・林道春・宮本武蔵・英一蝶ほか)、後撰和歌集冷泉為秀筆
第6室	書画	66	掛物(文武天皇・光明皇后・後陽成院・尊朝親王・花山院・定家・中山忠能・豊田秀頼・大石良雄ほか)、色紙、短冊、巻物(近衛信尋・伏見貞建親王・後三年軍記絵図)
第7室	書画	35	掛物(徳川家康台翰・徳川秀忠・徳川家光・加藤清正・水戸斉昭ほか)、巻物(近衛龍山)、平家物語(飛鳥井雅綱筆)、伊勢物語(下冷泉為政筆・勘解由小路秀定筆・葛岡宣慶筆)、百人一首(葛岡宣慶筆)、手鑑、巻物(狩野常雲筆百鬼夜行図、合浦山水鏡)
第8室	書画	13	掛物(蜀山人・錦城ほか)、額面昭翁書
第9室	書画	16	掛物(堀部安兵衛・芝山・藤森弘庵、徳川二十将図・武田二十四将図)
第10室	書画	51	掛物(文徵明・載文進ほか)、掛物(文晁富岳図)、巻物、手鑑、額面
第11室	書画	23	巻物(廣澤書・露寺元長筆職人画・羅生門絵図)、手鑑、屏風(関ヶ原軍陣図・大垣軍陣図・小原行幸図・犬追物図)
第12室	書画	26	掛物(空海・雪舟・隠元・道元・日蓮・法然・応挙幽霊図)、巻物
第14室	書画	10	掛物(海北松友・狩野探幽・狩野養川ほか)
第15室	書画	11	掛物(新井白石・山鹿素水ほか)
第16室	書画	15	掛物(橘光成・源家長ほか)
第17室	書画	16	掛物(其角・梅逸・応挙ほか)
第18室	書画	77	掛物(徂徠・隠元・慈惠上人・明恵上人・木食上人・石川丈山ほか)、短冊、扇面、色紙
第20室	書画	10	掛物(法眼鷹岱・文晁・探幽・狩野周信ほか)

含まれている。義塾は、明治十一年（一八七八）に青森県下の各学校に貸下げられた学田のほか、津軽承昭公による寄贈や購入によって、農地を集積し、学田の経営収益を通じて学校経営費に充てる取り組みを行っていた。<sup>26</sup> 菊池九郎は津軽地方で農地を開発し、北海道での農産物生産で成功を収めたことは、その後の北海道開拓に強力な基盤を提供したといえる。義塾所蔵の古器物は七〇点以上で、書画や武器、茶器、美術品など、江戸文化を象徴する品々が中心である。山鹿旗の進によれば、明治四年津軽承昭公より旧藩校へ津軽塗の文庫など数々の拝領があったとい<sup>27</sup>う。これに続き、旧藩校稽古館の施設や体制を引き継いでいたことから、そこで学び、弘前を去った旧士族からの寄贈品も多くあった。背景には、義塾結社人の一人で学校幹事ともなった兼松成言の影響も大きかったとみられる。

そのほかの出品者を見ると、公的機関から始まり、会社、寺社、旧藩士、豪商の名前が挙げられており、特定のコレクションに依存していないことが分かる。公的機関は学校以外にも、県庁、開拓使庁、山林局、青森電信分局、青森病院、弘前病院、各郡役所などが含まれており、主催者は私学であったが、県や郡役所、公的機関、公立学校も積極的に協力していたことが示唆される。特に、設立して間もない電信分局や明治一〇年に設立された病院は、文明開化の象徴とされる。県立青森病院は明治九年に設立されたが、火災で焼失し、新築復興したのは明治一二年一月であった。これには、青森県の支援もあった。青森県令として明治九年（一八七六）から明治一五年（一八八二）まで山田秀典が在任し、産業振興と教育政策に尽力したことが大きかった。

寺社には旧弘前藩内の長勝寺・最勝院・貞昌寺・報恩寺・玄徳寺・誓願寺・久渡寺・橋雲寺・梅林寺・海蔵寺・京徳寺・革秀寺・隣松寺・西福寺・宝積院・泉光院・耕春院・大行院・天津院・岩木山神社・高照神社・弘前天満宮が含まれている。会社としては興業社・開墾社・西洋開墾社・三井銀行がある。出品に協力した主な旧藩士には、主催者の三人のほか、菊池九郎、大道寺繁禎、松本道寿、喜多村勲、笹森儀助らがいる。旧藩士は出品者の中で最も多く、一人当たりの出品数も多かった。東奥義塾に次いで出品数が多い大道寺繁禎は、県議会議長や中津軽郡長、弘前図書館長などの要職に就いた人物であり、多岐にわたる活動を行っていた。旧藩士の出品物には、先祖伝来の古器物だけでなく、新たに展開した産業や新しい農産物に関連するものも多くみられる。豪商には、武田清七、福井三郎右衛門、藤田久次郎、関清六、北山長治郎、松木七右衛門などが含まれており、商業が発展していったことがうかがえる。武田清七は豪商の金木屋一三代当主で翌年の明治天皇御巡幸の際の行在所を新築する。まさに商業が軌道に乗っていた頃であった。福井三郎右衛門は御菓子司大阪屋、藤田久次郎は蔵元高嶋屋酒造、松木七右衛門は西津軽郡木造村の薬種問屋、北山長治郎は黒石の豪商であった。その一方で、在村の豪農の名は比較的少ない。その理由としては、この時期の地主・小作関係は地主的土地所有の発展期にあり、寄生地主化が進んでいなかった点、幕藩期以来の多くの豪農は、江戸時代以来の質素倹約を重視しつつ、農業改善への興味を持ち始めた段階でまだ軌道に乗っていないことが考えられる。

## 六 勸業製造物と関連出品物

この博覧会は、各室通じて、明治期ならではのこれまでにない新しい出品物が数多くみられ、後の津軽の特産品に結び付いているものも数多い。表2は総務省日本標準産業分類をもとに、これらをまとめた。三二二項目に分類され、最も出品人数が多いのは工芸農作物農業の二六人、続いて鉱業・採石業二三人、木材・木製品製造業二人である。ただし、鉱業・採石業に関しては出品者が採掘したのではなく、購入・採集品であることが注意される。

### ● 農林業

**米作農業** 菊池楯衛や小田桐其衛は、旧藩士である。菊池楯衛は後にリング栽培を、小田桐其衛は津軽風製作の貢献者として知られる。また、北山彦作は、浅瀬石村の豪農で、鳴海仁太郎は当時、独狐外二ヶ村の戸長であった。品種をみると、菊池の赤金平や赤穂は赤米、白仙北は白米と考えられる。また、秋田坊主や七霜、白仙北は晩生種とみられる。秋田坊主は一九世紀の主力品種となる。崩しはコボレで脱粒性の高い印度型赤米に似た品種とされる。そのほか餅米や陸稲も出品された。よつて菊池は、異なる条件で多様なイネ品種を試験栽培していたとみられる。鳴海の独結早稲は、北地型の津軽早生とみなされる。北津軽郡牛潟村から出品されたム口稲は、「モロ」とみられる。モロは日本型の赤米で、早生の可能性が強いとされる。<sup>28)</sup>三戸郡から三百成が出品された。東奥義

塾は北海道大野村産の稲を出品していた。後述するが、東奥義塾は稲だけでなく大野村産の麦や牧草も出品した。これは菊池九郎や笹森儀助が計画した岩木山麓常盤野の開拓に関連しそうである。

**米作以外の穀作農業** 玉蜀黍、麦、粟、豆類がある。出品者は全て旧藩士である。東奥義塾は稲と同じく北海道大野村産の麦を出品していた。

**野菜作農業** 葱、菜豆、瓜類、鹿茸、胡麻がある。食用の玉葱は、明治四年（一八七二）に北海道の札幌で試験栽培され、その後、明治一三年（一八八〇）に、札幌の中村磯吉が農家として初めて栽培を行ったとされる。西洋菜豆はインゲンマメとみられる。北海道農事試験場で品種比較試験が行われ、普及奨励された。金柑瓜はマクワウリ的一种である。早南瓜は早生種の西洋カボチャ、唐茄子はペポ種のカボチャとみられる。胡瓜は酢漬で長期保存された。

**果樹作農業** 注目されるのは西洋林檎だろう。西洋林檎の青森県への導入は、明治八年（一八七五）春、内務省勸業寮から三本の苗木が配布され、県庁構内に試植された。同年と翌年の計三回にわたって数百本の配布をうけて、リング栽培が広がっていた。大道寺繁禎や藤田貞元は配布を受けた旧藩士である。初成りは、明治一〇年（一八七七）八月、山野茂樹の苗木とされる。出品物は、旧藩士が中心となって屋敷地で栽培が始まり、それが結実していった頃であった。また、明治一〇年（一八七七）には、菊池楯衛は中畑清八郎らとともに、北海道開拓使農場七重官園で接木法など栽培技術を学んだ後に、「化育社」を結成し、苗木の生産・販売を行った。もう一つ注目されるのは西洋葡萄である。四人の出品者がおり、西洋林檎と同じく旧藩士によって栽培が進められていた。

ぶどうもリンゴと同様に、明治八年（一八七五）に内務省勸業寮から配布され、当時はリンゴとともに栽培に力が入れられていた。

**工芸農作物農業** 茶、煙草、箒草、蒟蒻のほか、麻、木綿、藍、紅藍花

（ベニバナ）といった繊維・染料の材料、人蔘や甘草、鹿茸といった生薬の材料がある。煙草は薩摩種がある。藤田貞元は明治七年（一八七四）より栽培していた。箒草は福井県吉崎山産のほか、菊池三郎が津輕西海岸産を出品した。麻は栃木種、藍は阿波種が導入された。藍は菊池九郎、本多東作（本多庸一の父）、糸屋利三郎が出品、菊池九郎は地藍とみられる藤崎種を出品した。そのほか長尾介一郎が紅藍花を栽培していたことが分かる。鹿茸（ロクジョウ）とは、オス鹿の袋角で、生薬の材料である。興業社のほか、竹内藤八郎が龍飛崎産を出品した。興業社は本町で明治一年（一八七八）創業の弘前で最も古い会社である。また土族授産のための旧弘前藩土族最初の結社でもあった。明治後半には綿布織物を主としていくが、後述の香水や円柱石・匡衡枕石など、この時期は、種々の事業を手掛けていたとみられる。

**ばれいしょ作農業** ジャガイモが出品された。明治前期では北海道および北関東甲信から北陸に集中し、東北は太平洋側に偏っていた。<sup>29</sup> 特に山間部では多く栽培されている。青森では、早生種を試行するものの霜に弱いため普及しなかったようである。

**畜産農業** 後に菊池九郎らによって、東奥義塾経営のために北海道開拓が構想されるが、この段階で牧場経営の洋式技術を積極的に学んでいたことが分かる。

**養蚕農業** て蚕の飼育及び蚕種の製造 明治六年（一八七三）には一

括購入した桑苗を払い下げるなど、青森県は蚕糸業を推進した。紙漉町製紙場では蚕種紙の製造も手掛けていたことが分かる。弘前や八戸では土族授産のため、城址内に桑や茶が植えられた。また明治一〇年には養蚕熟達者を招聘して山蚕の養蚕実験を実施したという。<sup>30</sup> この実験の成果が、葛西富弥の出品物のようである。しかしながら、弘前での蚕糸業は明治中頃には落ち込み、三戸郡で勃興する。三戸郡の出品物が多いのも、技術が向上し良質な繭の生産が始まったことがうかがえる。明治一三年（一八八〇）には養蚕・製糸を目的とした盛蚕社が設立、また青森県において初めての繭と生糸の共進会が開催された。<sup>31</sup>

**漁業** 田貝は、イシガイ科の淡水産二枚貝である。北鯨（きたふぐ）は俵物の一つとみられる。漁業に関しては、後述の水産食品の昆布加工品を除けば、出品は少ない。開拓使による北海道での鮭など魚介類缶詰製造は明治一〇年（一八七七）とされる。しかし、青森では、野菜を中心とした瓶詰が試作された程度であった。

**鉱業・採石業** 銅や鉄、満滝（マンガン）といった資源鉱物が目立つ。陶磁器原料の白土や、泥炭の一種で燃料とされた「サルケ」も出品された。珍石との判別がつかなかったものに生薬の材料となるものがある。北岡守泊ら出品した禹余糧（うよりょう）は褐鉄鉱の一種、鮭答（へいさらばさら）は獣類の腸内に生じる結石、菊銘石はイシサンゴ類の一種で腔腸動物のキクメイシが海中の岩につくった炭酸カルシウムの骨格である。三つとも生薬の材料にもなった。

**建設業** 木材標本のほか、三戸郡斗内村から漆が出品された。

**製造業（食料品製造業）**

**畜産食料品製造業** 青森県庁から乳油製造器械が出品された。後述の農機具と合わせ牧畜業とかわりがある。ただし生産品の出品はない。

**水産食料品製造業** 中師村(現、外ヶ浜町)の戸沢鉄十郎が、発明品として昆布油・昆布晶を出品した。

**野菜缶詰・果実缶詰・農産保存食料品製造業** 根曲がり竹の瓶詰がある。商品として試作されたものとみられる。

**糖類製造業** 蘆粟(ろぞく)はソルガムの一種で甘味料の材料である。当時輸入品であった糖の国内栽培は、明治政府での課題となっており、その勸農に力を入れていた。明治一三年(一八八〇)二月に大阪で開催された綿糖共進会では、青森県からも蘆粟糖が出品された<sup>32)</sup>。

**動植物油脂製造業** 木綿地桐油、肝油、向日葵油、ひまし油が出品された。**その他の食料品製造業** ブランデーは、県下に自生する赤ブドウを利用し、勸農局の指導により試製していた<sup>33)</sup>。阿片は弘前藩が製造、秘薬として知られた「一粒金丹」の原料である。また製麺業の存在も注目される。山間部では、換金作物として根茎類からのデンプン製造が盛んだったことが分かる。

**〈繊維工業〉**  
**製糸業、紡績業** 先述の養蚕農業と同じく、南部地域の出品者が目立つ。また弘前では旧藩士の出品が主である。

**染色整理業** 巾着は高齢者の製作品であり、学生だけでなく、高齢者の出品も注目される。

**〈木材・木製品製造業〉** 竹細工、葛細工縄、筵の生産は特産品の主なものであり、他府県へ移出された。

**〈紙・紙加工品製造業〉** 南部地域の出品が多い。紙漉町製紙場は、弘前藩の御用紙漉座跡の後継とみられる。蚕種紙の生産も注目される。

**〈印刷・同関連業〉** 東奥義塾から中国、アメリカの新聞紙が出品された。

**〈化学工業〉** 青森県では浅虫で製塩にも力を入れていたことがうかがわれる。なお、土族授産のために明治一二年(一八七九)に設立した開牧社は、事業内容を牧畜から産馬と製塩に変更し、明治一五年(一八八二)に浅虫で温泉の熱度を利用した製塩場が建設される。

**〈窯業・土石製品製造業〉** 丸山吉郎右衛門出品のアメントはセメントのこととみられる。

**〈陶磁器〉** いわゆる悪戸焼が出品された。明治中頃、石岡林兵衛は土手町で津軽陶器卸・小売販売所を経営し、製陶だけでなく小売業にも力を入れた。博覧会では日用雑器である挿鉢が出品され即売された。

**〈金属製品製造業〉** 津軽打刃物は、この時期には、刀から包丁類への転換が始まっていたことがうかがえる。

**〈ほづき・蒲シ製造業〉** 大小箒が出品された。なお工芸農作物として箒草の栽培も実施されていた。

**〈そのほかの製造業〉** 漆器はすでに、全国区の博覧会で多くの賞を受賞しており、そのため勸業品のなかで独自の枠を持ち、展示に力を入れていた。賞状には青海源兵衛の内国博覧会・京都府博覧会・米国博覧会・澳国博覧会の賞牌、藤田貞元の共進会授与賞がある。津軽塗の原型を作り、代々源兵衛を名乗った彼は、特に韓塗(唐塗)の技術で津軽塗の代表的な職人として知られていた。各賞牌は、明治一〇年の第一回内国勸業博覧会、明治四年の京都博覧会、明治九年(一八七六)のフィラデル

ファイア万国博覧会、明治六年（一八七三）のウィーン万国博覧会のものとみられる。明治新政府として初めて参加した万国博覧会であるウィーン万国博覧会でも「津軽塗」として八名が出品し、その製品は直売された。明治一三年（一八八〇）七月には本町に漆器樹産会社が設立され、明治中期には弘前の代表的な工業製品へ成長する。摺附木はマッチのこを指し、明治二二年（一八八八）には改光社というマッチ製造会社も存在した。

●情報通信業 不別顛現字紙器は、『受取簿』のみに記載があり出品者は不明である。機械の詳細は不明だが、現字紙を含むことから電信機の種類とみられる。

●金融業 三井銀行弘前出張店が古貨幣を出品した。

●農機具 ショウアップルはシヨベル、スペーエスはスベード（方形鋏）、レイキ・レイキ・リキは手把、ヘーレイキは把付草削（牧草収穫機）、ホーは草削、ホークは又把、フラオはプラウ（犁）、カッチヘイトルはハッチエツト（手鋏）とみられる。青森県庁の西洋農具からは、馬耕を推進していたことが分かる。欧米農業を取り入れようとした内務省勸業局は、西洋農具を使用試験のために各府県に貸し出している。出品物は青森県への貸出物にはば対応する。工藤清則の出品物からは、西洋農具の一部が国産化し流通し始めていることが分かる。明治一〇年（一八七七）、県会議員大道寺繁禎、県庁第二課勸業課にいた笹森儀助と士族授産のために常盤野開拓を考え、岩木山麓の常盤野を視察した。明治一二年（一八七九）一〇月、同じく開拓準備のために、菊池九郎は長尾介一郎と中畑清八郎とともに七重勸業試験場を見学している。博覧会直前の

明治一三年（一八八〇）七月一日付で大道寺、芹川高正、菊池九郎の連署で「農牧社創立致度官地所拝借願」を県令山田秀典宛に提出する。明治一五年（一八八二）には大道寺繁禎、笹森儀助らとともに農牧社を開業した。<sup>35</sup>

●そのほか 佐藤弥六出品の「沸騰散」は炭酸水素ナトリウムと酒石酸をまぜて水に溶かしたもので、二酸化炭素の泡が立つ。「風雨鍼」は氣象観測装置の一種とみられる。<sup>36</sup>

佐藤は、これらのほか、先祖伝来の品々や室内銃など多くを出品した。佐藤は、文久二年（一八六二）に勝麟太郎の塾で軍事学を学び、慶應元年（一八六五）に慶應義塾に入社している。藩からは、洋学を学ぶため測量書などを借用していた。その後、養蚕、林檎栽培を行いつつ、洋物店を開業、勸業を推進し博覧会の後継となる品評会の中心的な役割を果たす。福澤諭吉からの信頼も厚かった。<sup>37</sup> 菊池九郎をはじめ、旧藩で洋学を学び国元に戻った旧藩士たちが原動力であった。

藤田の共進会授与賞は、明治一三年（一八八〇）、青森県において初めて米大豆麻繭生糸共進会が開催されており、藤田の出品物が煙草や生糸であることから、この際の授与賞とみられる。

このように、出品分野は多岐にわたり、政府が意識した内国勸業博覧会が国内物産の開発と奨励を目的としたのと同様に、地域の物産の開発と奨励の点でその目的を大いに果たした。後に特産品へと成長していく商品作物や工芸品の出品が多かった。一方、他の地域の博覧会出品物と比較すると、鉄鋼・非鉄金属製造業、機械器具製造などの製造業、運輸・

郵便業の出品は見当たらない。また、漁業や金融業、出版業の出品も少なかった。特に鉄鋼・非鉄金属製造業は、その原料は出品されていたが、効率的な採掘や精錬を行う技術を示す出品はなかった。また、紡績など機械の出品は見られるが、製造に関しては移入品が主で、自作や発明・改良品はほとんど見当たらなかった。金融業においても、明治一二年（一八七九）に青森県で初めて第五十九国立銀行が設立されたが、出品は三井銀行の新大判並五両判の古金銀の出品にとどまっていた。こうした産業分野の傾向は、青森の近代化の特徴を表していると考えられる。

### おわりに

明治初期の博覧会は、行政主催の物産博覧会と、博覧会社を組織する民間主催の民設博覧会に分類される。これらの博覧会は、通常寺社や旧城跡を会場として使用された。対照的に、本博覧会は私立学校が主催し、学校施設がその会場となり、学生が主要な運営役割を果たした。出品物は数千に上り、その内容も、第一回博覧会と同じ古器物に限らず、勸業や海外からの展示品など、万国博覧会と勸業博覧会の要素が組み込まれていた。弘前の規模を考慮しても、同時期の地方博覧会と比較しても特異な存在であった。

博覧会成功の背後には、行政、主催者、出品者の三者が共通の目的を共有したことがあった。まず、行政に関しては、当時、青森県には他の多くの府県に設置された農業試験場がなく、弘前士族の中の不平分子の影響もあり県令の頻繁な交代が勸業事務に停滞を招いていた。<sup>88</sup>これによ

り、新しい農業技術や品種の導入と普及が妨げられていた。旧士族の不満対策を講じつつ士族授産と殖産興業を進めることが、県令山田秀典らにとって大きな課題であった。殖産興業を大衆に拡げるためには、専門的な文献や教育だけに依存せず、内国博覧会のようなモノを介した展示が、重要であることが博覧会を通じて明確に認識された。また、新しく設立された西洋式の公立学校や病院は、その維持、発展のためにも、その存在価値を広くアピールする必要がある。

次に主催者の須郷元胡、本多庸一、田中眼叟は、実業家と教育家の側面を持ち合わせていた。複数の会社設立にかかわり、北海道をも視野に入れた牧場経営を計画していた。また封建的な束縛と、偏狭で排他的な地域主義を打破しようとした本多<sup>89</sup>は、第一回の旧士族・寺社に偏った出品の反省から、出身にかかわらず、老若男女全員が出品者になり得る第二回はまさに理想であった。そのため、出品者には費用や運搬など経済的な支障をできるだけ排除した。また当時の博覧会では、産物の審査、褒賞が実施されていたが、本博覧会でこれを実施しなかったのも、もちろん審査者不足の面もあるが、主催者側の参加を第一とする考え方があったのかもしれない。結果的に、これは功を奏し出品者の目論見が十分達成できただけでなく、青森の特産物につながる職人層、農民層へ新規産物の生産意欲の増進と生産量の拡大へとつながった。また、漆器や木通細工など伝統工芸に、新しい考えを取り込んでいく手掛かりにもなった。博覧会によって農業生産品の改良を促進させた一方、機械類など工業生産品が少ない点は、外部からの導入品に依拠し、内部での技術改良が未発達であったことがうかがえ、後の農業生産にも影響を与えて

いくことになる。教育面では運営の多くを学生主体で担当させることで、地域での活動を実践的かつ主体的に学ぶ機会となった。重要なのは、従来の研究でいわれているような、地域社会への新しい知識や文化の啓蒙<sup>40</sup>のような一方的なものでなく、出品者や出品物から学ぶことで、地域を理解することも東奥義塾が重要視していた点である。博覧会はもともと福澤諭吉が慶応二年（一八六六）『西洋事情』において日本で初めて紹介した。博覧会の趣意とは、モノを通じてお互いの知識や技術を交換、理解して良いところを取り入れることで、文明を推進させる場<sup>41</sup>であった。明治四年（一八七二）の京都博覧会は東京遷都後の沈滞ムードからの復興博覧会であった。弘前も県庁移転と大火後の沈滞ムードからの復興が目的であり、かつ福澤諭吉から多くの考えを吸収していた主催者達には、教えを具現化する大きな機会であった。

そして出品者側にとって、旧藩士が出品者の多くを占め、古器物が半数以上を占めることから、依然、名宝や珍品を集めた旧来の見世物的な要素も多分に含んでいた。革新性だけが注目される当の東奥義塾や菊池九郎ら主催者側も先祖伝来の古器物を出品している。各部屋壁面に掛物、その下に文明開化を象徴する品々が並ぶ光景は、いわば新旧双方のモノが交差する二面性があった。この点は、旧藩校から出発し、洋学と国学双方を教育していた東奥義塾ならではの特徴がモノとして表面化する。旧藩士や豪商からすれば、新しい産物だけでなく旧藩の家柄の誇りを保てた点で、保守・革新双方が見せたい内容が均衡し却って博覧会の成功に結び付いたといえる。

さらに一見、こうした古器物の展示は、近代化と無関係に見える。し

かし、主催者側の開放的な展示の考え方によって、展示品に学問的要素が加わっていることに注目すべきだろう。歴史学、軍事学、算学、地理学、医学、植物学、考古学に関わりのある標本が出品された点は、単なる見世物ではなく、学術標本として展示する価値が萌芽していたことを示し、近代の「博物館」へのまなざしが見て取れる。

## 註

- (1) 國 雄行『博覧会の時代 明治政府の博覧会政策』（岩田書院、二〇〇五年）。
- (2) 山本光雄『日本博覧会史』（理想社、一九七〇年）。石上敏「近代日本黎明期の博覧会」（『大阪商業大学論集』第一五巻第一号、二〇一九年）六五〇—六七〇頁。
- (3) 東京文化財研究所 編『明治期府県博覧会出品目録 明治四年—九年』（中央公論美術出版、二〇〇四年）。
- (4) 塩原佳典「明治初年代における地方博覧会の歴史的意義 筑摩県下博覧会を事例として」（『日本歴史』第七六八号、二〇一二年）八三—九九頁。大野真由「明治七年における若松博覧会 戊辰戦争後の復興と人々」（『駒沢史学』第八六号、二〇一六年）一三八—一六六頁。
- (5) 藤沼邦彦・深見 嶺・工藤清泰「葦虫山人の「陸奥全国神代石古陶之図」と青森新聞の「第二回弘前博覧会縦覧の記」について」（『亀ヶ岡文化雑考集』、二〇〇八年）七九—一〇四頁。
- (6) 東奥義塾学友会 編『東奥義塾再興十年史』（東奥義塾学友会、一九三一年）。
- (7) 前掲註(6) 東奥義塾学友会編。
- (8) 弘前市立図書館蔵。



- (9) 目録原文に従ったが、正式には「返魂香之図」。俗称が使用された点からも見世物的な意味合いが強かったことが分かる。
- (10) 青森新聞第二三二号、明治十三年七月一日付。
- (11) 読みやすくするために適宜句読点を付した、旧字体は原則として常用漢字に改めた。以下同。
- (12) 以下、歴史背景には「新編弘前市史」編纂委員会編『新編弘前市史 通史編4（近・現代1）』（二〇〇五年）、青森県史編さん近現代部会編『青森県史資料編近現代1』（二〇〇二年）を参考にした。
- (13) 青森新聞第二三三号、明治十三年七月一三日付。
- (14) 明治十三年八月二十七日「弘前第二回博覧会縦覧の記」『青森新聞』第二五三号。なお紙幅の都合上、一部を省略する。
- (15) 明治十三年八月三十一日「弘前第二回博覧会縦覧の記続」『青森新聞』第二五五号。なお紙幅の都合上、一部を省略する。
- (16) 明治十三年九月一日「弘前第二回博覧会縦覧の記続々」『青森新聞』第二五六号。なお紙幅の都合上、一部を省略する。
- (17) 船水 清『岩川友太郎伝―日本貝類学の開拓者』（岩川友太郎伝刊行会、一九八三年）。
- (18) 細井幸兵衛「青森県の北限・南限植物」（『植物地理・分類研究』第五八号、二〇一一年）七七一―七七八頁。
- (19) 前掲註(6) 東奥義塾学友会編、二三頁。
- (20) 東奥義塾『東奥義塾再興三十年史』（東奥義塾、一九五二年）。
- (21) 筆者蔵。
- (22) 前掲註(20) 東奥義塾。
- (23) 前掲註(6) 東奥義塾学友会編。
- (24) 北原かな子・宮本利行・肥田野豊・北原晴男「明治13年前後の「殖産興業」の動きと津軽の藍について 旧弘前藩士族長尾介一郎の日記から」

- (『弘前大学教育学部紀要』第八九号、二〇〇三年) 六一―六七頁。
- (25) タイマイは熱帯・亜熱帯に生息するウミガメであるが、稀に暖流に乗って漂着する。あるいは、ここではウミガメ全般を示す可能性もある。いずれもその珍しさゆえに出品されたとみられる。
- (26) 斎藤重徳「菊池九郎の北海道開拓」（『東奥義塾研究紀要』第三集、一九六七年）。
- (27) 前掲註(6) 東奥義塾学友会編。
- (28) 嵐 嘉一『日本赤米考』（雄山閣、一九七四年）。
- (29) 清水克志「近世・近代移行期における馬鈴薯の普及実態とその地域的特質」（『秀明大学紀要』第一三三号、二〇一六年）一二五―一四七頁。
- (30) 田村正夫「東北地方北部における明治初期の開発政策―特に蚕糸業との関連において―」（『歴史地理学紀要』第七号、一九六五年）七一―九三頁。
- (31) 青森県勸業課「青森県米大豆麻繭生糸共進会報告」一八八四年。
- (32) 國 雄行「内務省勸農局の政策展開 内藤新宿試験場と三田育種場一八七七―一八八一年」（『人文学報歴史学編』第四四号、二〇一六年）六七―九五頁。
- (33) 前掲註(32) 國二〇一六年。
- (34) 農事報告第一四号「各府県西洋農具使用ノ試験―農林省農務局編一九三九年『明治前期勸農事蹟輯録』上巻）大日本農会。
- (35) 東 喜望「笹森儀助と農牧社」（『白梅学園短期大学紀要』第三六号、二〇〇〇年）一一―四頁。
- (36) 中井幸太郎抄訳『風雨鍼用法畧記』（一八七八年）。
- (37) 坂井達朗「幕末・明治初年の弘前藩と慶應義塾「江戸日記」を史料として」（『近代日本研究』第一〇号、一九九三年）一九三―二四二頁。
- (38) 前掲註(32) 國二〇一六年。

(39) 堀江洋文「旧津軽藩士本多庸一の信仰と思想」(『専修大学人文科学研究月報』第三二二号、二〇二三年) 二二一―二五三頁。

(40) 新谷恭明「東奥義塾の研究」(『日本の教育史学』第二卷、一九七八年) 四―二二頁。

(41) 國 雄行『博覧会と明治の日本』(歴史文化ライブラリー 二九八、吉川弘文館、二〇一九年)。

【謝辞】 文献の読解に際し、瀧本壽史氏のご教示を得た。また、青森新聞や明治七年『博覧會物品目録』『青森新聞』の閲覧に際して弘前市立弘前図書館のご協力を得た。末筆ながら御礼申し上げる。

(かみじょう・のぶひこ 弘前大学人文社会科学部教授)

表2 勸業製造物と関連出品物一覧

項目		出品人数	出品者 出品物	
●農林業	米作農業	12	下山藤太 弥九郎稻粳・玄米、小田桐其衛 縞稻・陸稻、杉山昌亮 粳、菊池橋衛〈鷹匠町〉 稲赤金平・稲白仙北・稲糸餅・稲七霜・稲穂崩し・稲赤穂・稲秋田坊主・稲中稲金平・ 稲外山坊主・稲黒餅・陸稻、北山彦作黒 真土粳・玄米、鳴海仁太郎〈独狐村〉独蝸早稲・ 津軽早生、牛瀧村 ム口稻、小山内辰三郎〈牛瀧村〉ム口稻、工藤與慶〈牛瀧村〉ム口稻、 田中左作〈三戸郡斗内村〉俗名 三百成 (5合代5錢)、阿部喜七・関野喜四郎〈三戸郡 八戸町〉玄米 (3合代3錢)・玄餅米 (3合代3錢3厘)、東奥義塾 稲北海道大野ノ作	
	米作以外の穀作農業	13	東奥義塾 六角大麦北海道大野ノ作・白燕麦米国種北海道大野ノ作・黒燕麦北海道大野 ノ作・白小麦北海道大野ノ作・赤サヤ北海道大野ノ作・黒燕麦魯国種北海道大野ノ作・ 大麦李国種北海道大野ノ作・麦北海道大野ノ作・二角大麦独逸春時種北海道大野ノ作、 菊池九郎〈蔵主町〉小麦米国種赤自作・小麦米国種白自作・小麦仏国種春時自作、菊池 橋衛 粟虎ノ尾自作・粟カラ白自作・粟赤餅・粟黒堂餅・粟穂・蠶豆自作・洋さゞけ・ そら豆、成田邦彦〈鷹匠町〉大麦春時自作、中畑清八郎〈相良町〉小麦・西洋麦、長尾 助一郎 米国種小麦自作、杉山昌亮 大小麦・大小豆、諏訪内甚蔵〈三戸町〉和小麦2合、 田中太作〈斗内村〉小麦 俗名 ホロキ (3合代3錢3厘)、阿部喜七・関野喜四郎〈三戸町〉 新小麦 (3合代2錢)・精粟 (3合代3錢)・玄稗 (3合代6厘)・蕎麦 (3合代1錢2厘)・新大 豆 (3合代1錢2厘)・大豆 (3合代15厘)・赤大豆 (3合代14厘)、村井清兵衛〈斗内村〉 大豆種俗名白莢 (5合代2錢)・大豆種俗名三百成 (5合代2錢)	
	野菜作農業	9	菊池三郎 玉葱、松井龍太郎 平葱、白瓜自作、菊池橋衛 西洋菜豆自作、一戸熊太郎 大 菜豆札幌ヨリ種子を得たり、成田邦彦〈鷹匠町〉金柑瓜自作、赤石謙吉 早南瓜洋名ス クワン自作 早唐茄子・白瓜、佐藤喜一郎 清国ノ長胡瓜自作、東奥義塾 胡瓜ノ酢漬、 諏訪内甚蔵〈八戸町〉黒胡麻	
	果樹作農業	8	大道寺繁禎 西洋林檎自作瓶入3、藤田貞元〈蔵主町〉西洋林檎、菊池三郎 洋種葡萄、 菊池橋衛 甲州葡萄自植3蔓・西洋桃、菊池九郎〈蔵主町〉無花果自作・紫薄荷自作、 松井龍太郎 洋種葡萄、津軽薫 西洋葡萄、諏訪内甚蔵〈八戸町〉鬼胡桃・姫胡桃	
	工芸農作物農業	26	菊池九郎〈蔵主町〉麻朽木種自作・縮藍藤崎種自作、菊池三郎 箒草西海岸ノ産・甘草 自作、菊池橋衛 葉煙草薩州出水ノ産・蒟蒻草自作・茶銘黄金ノ葉自園製造、成田邦彦 〈鷹匠町〉真綿自作、中畑清八郎 薩摩種煙草・別種煙草・煙草葉明治11年・煙草葉明 治12年、藤田貞元 葉煙草明治7年ヨリ同11年迄の自作、佐藤和左衛門 蒟蒻、益子力太 郎 茶銘黄金ノ葉自園製造、大道寺環 茶銘泉碧自園製造・茶銘松ノ雲自園製造、伊香源 蔵 箒草越前吉崎山ノ産、喜多村勲 箒草越前吉崎山ノ産、本多東作 阿波ノ小千本藍、 糸屋利三郎〈紺屋町〉藍阿州青千本・自種縮藍、東奥義塾 朝鮮人參北海道札幌ノ出作、 長尾助一郎 朝鮮人參種自作・紅藍花自製、山田浩蔵 猿手人參、浅利篤之助〈和徳町〉 御種人參江利山自産代34両、興業社〈本町〉鹿茸、竹内藤八郎〈鷹匠町〉鹿角龍飛崎 ノ産、橋本八右衛門〈八戸町〉茶壺器 (半斤積是ノ1斤ノ代価鑑定ヲ乞フ)、永田富衛〈八 戸町〉茶半斤1斤ノ代価鑑定ヲ乞フ、小笠原隆安〈根城村〉麻55匁 (代22錢)・縮麻22 匁 (代10錢)、諏訪内甚蔵〈八戸町〉椿黒皮百匁・茶小箱入・熨斗煙草1把、小笠原勇 治〈桜内村〉熨斗煙草1把、吉田仁助〈桜内村〉熨斗煙草1把、諏訪内甚蔵〈八戸町〉朝 鮮人參	
ばれいしょ・かんしょ作農業	1	成田邦彦〈鷹匠町〉早生馬鈴芋自作		
●畜産農業		3	東奥義塾 牧草北海道大野ノ作、菊池九郎〈蔵主町〉牧草苜蓿など3種、長尾助一郎 亜 米利加防風ノ種自作	
●養蚕農業	て蚕の飼育及び蚕種の製造	10	成田邦彦〈鷹匠町〉白繭自作300粒、藤田貞元〈蔵主町〉繭白1升・黄1升、瀧川平十 郎 繭白1升・黄1升、葛西富弥 別種天蚕繭試養岩木山裾野二産ス・同種紙・同乾膳、 山野治三郎 養蚕器械、佐藤正二〈八戸町〉繭1箱、浦山太吉〈八戸町〉繭、緒方重七〈田 子村〉繭100粒、富田左内〈田子村〉繭30粒、紙漉町製紙場 蚕種紙5枚	
●漁業		2	西津軽郡役所 田貝・シジミ貝、太田重蔵 北鱈	
●鉱業・採石業		23	木村繁四郎 石炭肥前唐津産・水銀鉾備中産、菊池三郎 石炭石深浦産・石炭肥前唐津 産・石炭英国産・石炭西津軽郡岩崎産・土灰西津軽郡長浜産・白石・満滝 西津軽 郡之産・鉛石東津軽郡・磨砂、吉川政次郎 石炭八光澤産、佐々木原武兵衛 石炭、高 倉良蔵〈下白銀町〉銅鉱、丸山吉郎右衛門 銅鉱・満滝、菊銘石海産・鮮答馬之腹中ヨ リイツ、松尾治左衛門 鉛鉄小国山産・鉄砂、長尾助一郎 色土宮館村産・磁石・白 石英肥後蘆北ノ産、齋藤正意〈本町〉水化銅白根銀山産・水銀丁銅・湯揚銅、東奥義 塾 磁石・湯ノ澤銀、平野清助 磁石、飯塚郡平 銀砂飯詰村産、宮本金平 (和徳町) 硫黄岩木山産1塊、中瀬清十郎〈相馬村〉白土相馬村産、工藤巳之助〈砂子瀬村〉 白土砂子瀬村産1袋、成田邦彦〈鷹匠町〉石灰百沢三本木ノ産、橋本文助〈八戸町〉 風化石灰及原石箱入 (代1円27斗)、大瀬與三太〈馬屋町〉土炭、上条郷喜右衛門 (田 子村) 銅鉱、北岡守泊 禹余糧・鮮答馬之腹中ヨリイツ、三浦武二郎 禹余糧、阿部松 太郎 菊銘石海産、佐藤惣助 菊銘石海産	
●建設業		4	山林局青森出張所 日本木材ノ見本・県内木材見本厚板67丸木36、東奥義塾 有用木材 抄覧、丸山吉郎右衛門 旂檀、盛越鏡之助〈斗内村〉漆1斤	
●製造業	食料品製造業	畜産食料品製造業	1	青森県庁 乳油製造器械
		水産食料品製造業	1	戸沢鉄十郎〈中師村〉昆布油・昆布晶發明製造品20箱2瓶 青森産 上品10 (代33錢)・ 中品十 (代25錢)
		農産保存食料品製造業	2	本多庸一 酢漬ノ籤、木村四郎 酢漬ノ籤

●製造業	食料品製造業	糖類製造業	4	豊嶋六二郎〈馬屋町〉砂糖蘆粟製、三浦武二郎 苦甘糖、諏訪内甚蔵〈三戸町〉蘆粟糖蜜、菊池九郎 蘆粟糖製造手続書
		動植物油脂製造業	4	菊池三郎 山葵油、戸田千代吉 木綿地桐油自製造、青森県庁 肝油、諏訪内甚三〈三戸町〉向日葵油小瓶入・ヒマス
		その他の食料品製造業	11	青森県庁 プランデー、菊池三郎 スグリ酒・山葵油・梅李酒、成田市郎兵衛〈元長町〉干饅頭目形391丸（代47銭6厘 箱代22銭 紙代2銭5厘）・干素麺目形255丸（代41銭9厘 箱紙代前同断）、八戸幾左衛門 煎餅、高井安兵衛 湯葉、飯塚文助 片栗ノ粉、小畑善兵衛〈田代村〉蕨ノ粉・山百合ノ澱粉・栃ノ粉・片栗ノ粉、温湯村 片栗粉、常盤野村 蕨ノ粉、木村繁四郎 寒晒、工藤福次 阿片
	繊維工業	製糸業、紡績業	18	菊池九郎 生糸3把目144匁、成田邦彦〈鷹匠町〉生糸自作、藤田貞元 生糸14把目156匁、浦山太吉〈八戸町〉生糸箱入、工女増田すゑへ年63有勤社 生糸、泉山源助〈小向村〉生糸目形35匁、新宮奥運・小笠原隆安〈八戸町〉生糸21匁、諏訪内甚三〈三戸町〉天蚕生糸3匁・アイ糸25匁・イチビ糸15匁、雇地保三〈玉掛村〉白繭生糸1箱、上条郷喜右衛門〈田子村〉生糸1把、緒方豊七〈田子村〉生糸1把15分、福田官左衛門〈田子村〉生糸1把7匁5分、福田忠蔵〈田子村〉生糸1把10匁、富田左内〈田子村〉生糸1把、鈴木伊太郎〈五戸村〉絹木綿2反開産社出品（代1圓10銭95銭）、蒔田長蔵〈八戸町〉白絹1反（代4円60銭）・稲妻菱織1反代（3円80銭）・綿春寄属1反（代2円75銭）・白七七子織1反（代5円20銭）、齋藤文雄 紡績器械・かな糸合せ器（堅綿共紡績器械之糸二織）・絹木綿1反（右の機械にて紡せし糸を以て製す）
		染色整理業	3	糸屋利三郎〈紺屋町〉染本、小田桐岩蔵 巾着、89老人製造長崎友太郎 巾着
	木材・木製品製造業	21	成田作兵衛他3名〈植田村〉竹細工、本間伝之丞 竹細工手籠、本間林之助 竹細工味噌漉、古川弥作 蔓細工手籠共進会褒賞状アリ、笹森儀助 蔓細工籠、小山寅蔵 蔓細工手籠小山寅蔵製造、笹本清助 櫛、菊池三郎 十三草草筵十三村ヨリ、中田次郎八〈車力村〉葉 カラムシ、牛潟村 オケ履、工藤七五郎〈牛潟村〉トト筵袋織1枚、工藤與慶（牛潟村）トト筵1枚・三角筵1枚、鳴海重兵衛（牛潟村）オイ筵1枚、小山内勇作 三角筵・木履座・蔓細工、菊池橋衛 薇繩自製、小山内辰三郎〈十三村〉樽下駄十三 ねど、吉田新吉（大鰐村木地挽）路次笠5・茶台桜5・茶台函根形2・茶入壺形2・茶入茄子形2・フシ入壺形2・煙草入2	
	紙・紙加工品製造業	4	紙漉町製紙場 美濃紙1束・半紙1メ・長尺半切千枚・壺種紙5枚・塵紙1束、近藤寅吉〈八戸町〉美濃紙1帖（代9銭）、三浦庄七〈五戸村〉美濃紙2帖（代22銭）・半紙200枚（代23銭）・苦木半紙200枚（代18銭）・白切紙100枚（代10銭）・松皮切紙100枚（代8銭）・杉皮切紙100枚（代6銭）、松岡富人〈小中町村〉紙布1反（代1円30銭）	
	印刷・同関連業	1	東奥義塾 新聞紙・支那新聞3種・亜米利加新聞5種	
	化学工業	3	青森県庁 塩浅虫製、今規雄 石鹼製造器械・大度驗温器、葛西富弥 ハツクリ糊元高岡ノ産自作名ノ草根ヲ以テ製ス	
	窯業・土石製品製造業	2	興業社 円柱石・匠衛ノ枕石、丸山吉郎右衛門 アメント	
陶磁器	1	石岡林兵衛〈下湯口村〉摺鉢大（13銭）・中（12銭）・小（9銭）		
金属製品製造業	2	五十嵐常次郎〈賀田村〉包丁類魚庖丁1（1丁二付17銭）・薄刃庖丁（13銭）・同小庖丁（15銭）、櫻庭栄太郎 真鍮茶釜		
ほうき・ブラシ製造業	1	高橋権之進 大小帚		
漆器製造業ほか	14	工藤清則〈百石町〉フレードボー・中平硯箱摺出書模様五色塗2面・会席膳1枚・菓子入1・胴形盆五色塗6寸3枚組1組・胴形盆五色塗7寸3枚組1組・胴形盆錦塗尺3枚組1組、佐藤清次郎母佐々木栄八郎 長箸、須藤良彦 中硯箱（42銭6厘）・小硯箱（35銭8厘）・独弁当（56銭4厘）・箸箱（31銭7厘）・箸箱（26銭4厘）・蕨入（31銭6厘）・太々箸（3銭9厘）・長箸（3銭2厘）・中箸（2銭5厘）・小箸（1銭8厘）、阿保勝之助 百色塗重箱・漆絵顔面・五寸重箱津軽塗・大長栗皮上ケ売塗箸（代3銭5厘）・長栗皮上ケ売塗箸（代3銭）・並長檜皮上ケ売塗箸（代3銭）・青漆上ケ売塗箸（代3銭）・中漆上ケ売塗箸（代2銭7厘）、佐藤助五郎 七寸重箱自製、木村与惣吉 大●足膳自製、小林友三郎 津軽塗角布衣ほか自製、青海源兵衛〈大浦町〉賞牌内国博覧会褒賞状2枚添・賞牌京都府博覧会褒賞状2枚添・賞牌米内博覧会褒賞3枚添・賞牌内国博覧会褒賞1枚添・賞牌雛形、瀬戸師 佐藤忠次郎・同森田寿輔・同福山栄吉 塗師小山伊四郎〈東長町〉唐塗急須13・唐塗茶碗12・唐塗水コボン13・唐塗火入2・唐塗茶壺2箱・唐塗蓋物2 売物、矢川番寛 摺附木器械、興業社 香水		
●情報通信業	3	青森電信分局 電信器械、長尾周庸 海底電線見本、不別顯現字紙器（箱入錠有り 右へ附属品左二 箱入 長平瓶20個・楕円瓶20個・亜鉛銅板18枚・亜鉛板2枚・銅板2枚・現字紙2巻・器械墨汁1瓶・ゴム線Gヤールド・丹巻 使用物1色・接線捻4個）		
●金融業	1	三井銀行弘前出張店 新大判並5両判		
●農機具	5	青森県庁 大シヨウワフル・スベエス・鉄造レイキ・ヘーレーキ・ホー・4本爪ホーク・種蒔器械・西洋馬車ノ馬具、モルレンフラオ英製・フラオ英製・シヨスルフラオ米製・カッチヘイトル米製・一人蒔器・大鎌・草切器械・玉蜀黍珠落器械、開墾社 ホー、笹森儀助・西洋開墾社 荷車・七重勸業試験場報告第1号、工藤清則〈百石町〉肥後馬車・一輪車・鷹爪・引懸鞆・押鞆・レーキ・ホー・シヨウワフル・鋏（以上『列品目録』）、馬耕器械鞆・耙・轡・鷹爪・桿鋤、引懸ケ鋤、肥後鋤、駒浚・リキ・両リキ・鉄籠、一輪車（以上、『受取簿』）、白坂久蔵 草切り器械		
●そのほか	3	佐藤弥六 測量器械・物理器械・化学器械・沸騰散調合器・風雨鍼感覚●（風雨鍼）、県ノ2課 測量器（内1ツ棒・1ツ箱）、藤田貞元（蔵主町）博覧会出品目録、共進会授与賞		

※『受取簿』から出品者の住所が判明するものはく、直売品はその代金を（ ）で記す。